No.132
公民館だより
平成20年３月
宮津市字由良
由良の里センター内
由良地区公民館

「伝国の辞」から

由良地区公民館長　飯澤登志朗

出羽国米沢藩（現在の山形県米沢市）第九代藩主上杉治憲、（後の上杉鷹山）は江戸時代の名君として平成十九年に読売新聞が日本の自治体首長に対して行ったアンケートでも理想のリーダーとして一位に挙げられています。

十八世紀中頃の米沢藩は借財が累積する一方で石高は十五万石と少なく、かっての会津百二十万石時代の家臣団六千人を抱え、領民に占める家臣の割合が高く名家のプライドを重んじる余り、厳しい財政を強いられていました。

新藩主に就任した鷹山が財政を立て直した話は有名です。

その上杉鷹山が残した伝国の辞三ヶ条は代々その家訓として引き継がれていました。

この三ヶ条を要約しますと、

「自ら助ける自助」

「近隣社会が互いに助け合う互助」

「藩政府が手を貸す扶助」

であり、この三助を現在に置き換えて考えてみますと、

一、自分のことは自分でやろう。

二、隣近所で助け合っていこう。

三、自分や近所で出来ないことは行政の力を借りる。

上杉鷹山は、改革にあたって自ら倹約を行って土を耕し、帰農を奨励し、作物を育てる一方武士や農民に身分を問わず学問を学ばせる等その施策は現在の行政にも参考になります。

宮津市では「地域会議」の設置に取り組み、既に活発に活動している地域もありますが三助の精神がここに生かされていると思います。

去る一月、宮津市内の幼稚園、小学校、中学校による、「第四次特色ある学校・園づくり実践交流会」が開催され、自分の住む地域の歴史や産業、地域の人とのふれあい、街の美化等将来を見すえて自分たちの取り組みについて発表がありました。

子どもたちの堂々とした真摯な発表に参加者全員が感銘を受け、まさに「背に負うた子に教えられ」でした。地域の子ども達は、自分で出来ることは何か、色々な機会に学んでいます。

私たちは地域活性化や高齢化の時代に、子どもたちの将来の為に何を残してやれるのでしょうか。

今年の成人式は一月十三日に開催されましたが、昭和生れの若者だけの成人式は今回が最後で来年からは平成生れの若者が成人となります。

答辞のなかで「自分たちは成人したが未熟、これから社会に役立つ人間になりたい」と自分を見つめ将来に責任を果たすことを誓っていました。

平成十九年を表わす漢字「偽」に私たちは胸を張ることは出来ません。

いつの時代でも「三助」の精神が受け継がれていくことを願っています。

そうなれば「偽」が「善」または「活」になることでしょう。

行事報告

主事　磯田充亮

◎十月二十日（土）ふれあいグランドゴルフ大会

生涯教育の普及と健康づくりの推進、区民のコミュニケーションを深めるため、昨年に続き開催しました。

好評を得て参加チームが多く（17組85名）、昼夜二回に分けて実施しました。

コースは最長50ｍ最短15ｍの８ホール（上り坂有り）を設定一組５名でプレーその合計打数で順位を決めました。

成績

○ホールインワン９回（延９名）
○個人最少打数　20打
○個人最多打数　42打
○優勝　昼の部　寺代表　１２５打
　　夜の部　下石浦　１３３打
（他の成績は回覧でお知らせ済みです。）

◎十一月三日(土)文化の日 文化祭

今年も由良婦人会と協賛で開催しました。

今年は生花で例年出展の池坊に加え嵯峨御流の出展があり一層華やかさを増し、「由良川てんころレース」の写真集や木彫、由良の踊り歌集等目新しい作品が沢山展示され内容も充実してきました。

特に初公開の歌人与謝野晶子の直筆掛け軸が出展され、文化祭を盛り上げてくれました。

今年は１７４名の応募があり総数は昨年に比べ69点多い２９８点の展示があり、見学者もお天気に恵まれ昨年に比べ３００名多い約千名の方が訪れました。

内訳は
習字（書道含む）46点
絵画（ポスター含む）１００点
写真　33点　生花　28点
ちぎり絵　22点

その他、紙芝居、パッチワーク、和紙工作等がありました。

◎十二月二日（日）第二十五回市民卓球大会

宮津市民体育館で行われた大会に由良チーム（四名）として参加し、毎年優秀な成績を残しています。

○団体の部　Ｂ級　準優勝
○個人の部
女子Ａ級準優勝　日比道栄

◎十二月二十二日（日）「子供のびのび体験活動」子供料理教室

今年も宮津市食生活改善推進委員協議会（食改）の皆様の指導を受け、由良子供会連絡協議会との共催で「子供料理教室」を開催しました。

参加者は小学生32名幼稚園児３名で６班に分かれクリスマスケーキ作りに挑戦しました。今年はホイップクリームを手作りし包丁を使ってバナナの輪切りやスポンジケーキにバナナを挟む作業が加わりました。

作業は経験者が率先して教えきれいに飾り付けることができました。

作業後には食器・テーブル等の後片付を手伝う子供も見受けられました。

参加者の感想文は後頁に掲載します。

◎一月十二日（土）卓球教室開催

（毎月第二・第四土曜日開催）

グランドゴルフ同様、生涯スポーツの普及と健康づくりの推進の一環として冬場に適した運動として開催しています。

今年も三月末まで開催、気楽に参加してください。

◎一月二十日（日）新春公民館囲碁大会

例年どおり由良囲碁同好会の協力を得て開催しました。

今年は他の行事と重なり、参加者９名によるリーグ戦を行いました。

結果は次のとおりです（敬称略）

優　勝　飯澤登志朗（五勝○敗）
準優勝　中西　衛（四勝一敗）

「よく遊ぶ子」シリーズ

冬の巻（理科や生活科の応用に）

由良小学校長　山本文雄

人間関係が希薄化している。ケンカもない、集団で山や海へ遊びに行くこともない。とことん困ることもない。困っても大人が解決してしまう。

物に対して挑戦もしない。

与えられたものに対応しているだけ、思いきりしかられて、反省することもない。自分から働きかける力も弱くなっている。そんな子どもたちでも、自分達で考えて悩んで困った上で工夫して解決してはいあがると、その先には、なんと本物の楽しさがまっている。そんな体験をさせてやりたい。

子どものころの体験は、今となってはすべてが役に立っている。どこかでなつかしむ。

こんなすばらしい由良、ただで使えるこの自然、この宝物。もっともっと利用してほしい。

残念でしかたない。

「山道でのソリ遊び」

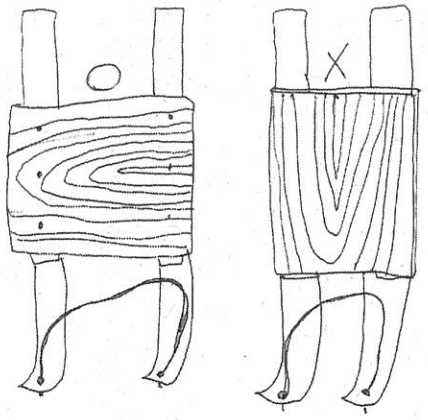
今のように数百円を出せば、プラスチックのソリが買える時代ではなかった。また、あんなによくすべるものだなどと考えもつかなかった。

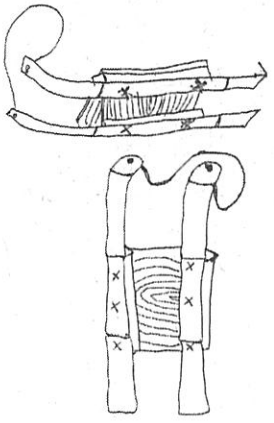
昔からの伝統のように、子どもは孟宗竹を切って、長さ一m幅七、八cmの竹の板をつくり、ナタで節をていねいにけずりとった。そして、先端をたき火にかざし、おりまげたのである。

竹を火であぶると皮の部分はやわらかくなり、熱い間にまげ水や雪でひやすと、まがったままでおさまるのです。

その竹に五十cmぐらいの角材をつけるのですが、それがむずかしい。雪に接する方からくぎを打つのですが、直接くぎを打つと、竹が割れてしますのです。竹が割れないように、皮の部分にノコギリで×に切り目を入れ×の中心にくぎの頭を入れこんでしまうのです。

角材の取り付けが終れば、次は、おしりを乗せる板をつけるのですが、何も知らない子どもは、板に柾目や板目があり、どうつければじょうぶなのか知らないので、出来上がったと喜んで、おしりをのせると、真二つに割れてしまいます。





つぎは、手づなのとり付けです。これまた何も知らなければ長さの調節など考えないで取りつけます。あとの運転で微妙に影響することなど知りません。

ソリはできあがりました。

昔は農業・林業はまだ盛んで山の奥まで稲作、みかん作りがおこなわれていた。ゆえに、山道も整備されていた。

幅五十～七十ぐらいのソリをすべらせるのには充分の幅である。その幅であるからスリルもあるのです。ソリのすべるルートからはずれると下の田に落ちるかガケ下まで落ちてしまうこともあるのです。でも雪がつ

もっているからケガはありません。

時々ルートからずれ、下の田やガケ下に落ちると、特に新雪なら、身の回りをたたきかためふみかためはい上がっていきます。

ある時など、友達が下の田に頭からつっこんで二本の足をバタバタ振っているのです。助けには行きません。昔の子はどうにかしておきあがってきました。

今の子だって、体験すれば、おき上がれると思います。

こんなこともあるだろうとすべる前には、ルートはしっかりふみかため、今で言う、ガードレール役の雪の壁もしっかりつくっておきます。

コースもできました。できるだけ長い距離をすべる子が上手なのです。へたな子は、ルートからはずれているか、自分の足でストップをかけ途中でとまるか、横にずれています。

このへんなら、国民宿舎の横の由良岳登山道、七曲八峠のくびきり松の辺り、石浦のみかん山辺にいいコースがあります。

「奈具海岸のノリ採り」

雪が降り、寒さが増すと日本海はシケる。

シケると波は岩場に打ち上げ岩には、天然の岩ノリがつく。

つくといっても、どこにでもつくことはない。

何年も遊び慣れると、岩場のどこにつくかは知ることができるのです。

とる道具など、その場でつくる。私の場合、貝ガラか流れついている金属の破片である。

道具なしではとれない。指先でつまんでもしれている。

それと、その日の天候である。天気がよくても波があれば危険である。波にも色々ある。静かだと思って行ったらなんと恐ろしいうねり波なのである。

音もなく近寄ってきて、人をさらっていく波である。

うねり波は本当にこわい。

天気もよく、波もなく最高の条件のときは、楽しいとり方ができる。おもしろいようにとれる。

それは、○○○○○……な方法です。おしえてあげたいなぁー

とってきたノリは砂やゴミをとり乾燥させる。

みそ汁に入れるとなんとも磯の香があるし、甘いし、おいしい。うどんに入れてもおいしいですね。

仮にノリがとれなかったら、ちがうものをとって帰ります。

まさに冬の海岸は珍客だらけ楽しいです。

時には、ナマコ・アワビもひろうこともあります。それから岩の割れ目のカメの手のゆがきたてのおいしいこと。ピンク色をしています。イカのような歯ざわりがあります。

以上冬の遊びを紹介しましたが、その他にタコ上げ、ウサギとり、メジロとり、スズメとり数々あります。

知恵を出し、工夫することで、自然に風のこと、動物の動き、植物の構造、つくりも覚え、知識として頭に入っていきます。

そして、一人でなく、二人三人と仲間と遊んでいると色々とイメージも広がり工夫も広がります。将来仕事をする上での、コミュニケーション能力や協調性の基礎となるのではないでしょうか。

あそびっていいなぁー

自然って感謝の心も身につけてくれるなぁー

「子供料理教室」

クリスマスケーキ作りに参加して（感想文を転記）

六年　浜本もも

今日はとーっても楽しかったです。ケーキ作りはみんなで協力して作りました。（けどみんなあまりやらず、ほとんどあたしがやりました。）けっこううまくデザインができました。

食べたらあまくおいしかったです。やっぱり手作りはいいなーと思いました。いろいろ手伝ってくれてありがとうございました。

六年　大森美沙

ケーキ作りは、少し形がくずれたりもしたけど、子供だけで作れてよかったなぁと思いました。それに、ホイップから作ったのでいい体験ができたと思います。これからも、こういうことがあったらまた参加したいと思います。

今日は、料理教室に参加できてよかったと思います。

六年　竹田真子

ケーキ作りでは、みんなで協力しておいしく作れることができました。

切る時に、大きいのや小さい形の人のができてしまいましたが、みんなおいしかったと言っていました。ご飯も、おいしかったです。そして楽しかったです。

今年で終わりなので残念です。

六年　枡田佳大

ケーキを作るときにホイップを周りにぬるのが難しかったです。でもみんな美味しそうに食べてくれてよかったと思いました。

昼食は美味しかったし全部食べてよかったです。

休けい中に遊べてよかった。楽しかったです。

またこんなことがあったらしてみたいです。

六年　山田栞奈

いろいろな学年とクリスマスケーキ作りができたし、ふつうの調理実習とはちがうので楽しかったです。ケーキ（ホイップも）は全部手作りだしオリジナルでできるし、おいしかったです。

またこういうことがあったらまたやりたいです。

六年　前畑直人

ケーキ作りは形が失敗したけど、おいしくつくれた。でももう少しきれいにつくりたかった。自分でも、もっとつくるのをやったほうがよかったなと思った。つくるのは大変だったけど、ぬるのはよくできた。

六年　岡本昇磨

今日の、ケーキ作りは　ケーキをみんなできょう力して作って、きれいにできたのが、うれしかったし、おいしかったです。

六年　吉岡和輝

はんの人といろんなことを話しながらケーキをつくるのがたのしかったしおいしかったです。

らいねんもでたいけどでれないのがざんねんです。

六年　岡野永莉

他学年の人といっしょにクリスマスケーキ作りができてよかったです。ふつうの調理実習では味わえないものができてよかったです。またこういう機会を作ってほしいと思いました。

六年　中西奏実

ケーキ作りは、きれいにでき

ました。周りにホイップをつけるのを工夫しました。バナナをつけるのも工夫しました。味はすごくおいしかったです。みんなで協力できよかったです。
お昼ごはんもすっごくおいしかったです！

五年　立井愛実

いろんな学年の人とケーキ作りをしてみると、意外に大変でした。でも、ふだんしゃべらない人としゃべれたのが良かったです。これからも、この行事がずっと続けば由良の人たちは仲良くいれそうだなぁと思いました。

五年　牛田翔太

ケーキの果物つけしかやってないけど、最後きれいにできてよかった。味もおいしかったのでよかった。

五年　枡岡佑奈

この教室は去年も来たので今年はどんなケーキになるのかとてもワクワクしていました。
今年はかざり付けもきれいにできたし、味もすごくおいしかったです。
自分たちで作ったケーキは見た目は少しだめでも味はさいこうだなぁと思いました。来年もさんかしたいです。

五年　吉岡諒亮

つくりはじめは、おそかったけどまあまあうまくしあがってよかったです。それにおいしかったです。ひるごはんもおいしかったです。

五年　白矢貴大

ケーキは見ためは悪かったけど、うまかったです。タッキュウもたのしみました。

五年　高野守

はんの人ときょうりょくしておいしいケーキができてうれしかったし、おいしかった。来年もしたいです。

四年　蒲原穂香

おいしいごはんも食べさせてもらって、ケーキを食べさせてもらって本当にありがたいです。
ケーキの材料もかってもらって、かたづけもしてもらって、本当にありがとうございました。
おいしいごはんと、ケーキ、ありがとうございました。今日来てよかったと思いました。もし来年あったらきたいです。
ありがとうございました。

四年　中西拓海

ケーキをつくって思ったことは、ケーキはきれいにできたしそのあとのたっきゅうもおもしろかったです。
ひるごはんもおいしかったです。

四年　白矢翔吾

ぼくは去年やったからじょうずにできると思っていたけどやってみたらむずかしかったです。
でもたべてみたらおいしかったです。

三年　吉岡直人

今日はクリスマスケーキはみんな「デスケーキ」だといっていました。でもおいしかったです。ケーキをたべおわったらたっきゅうをやったすごく楽しかったです。たっきゅうの次は昼ごはんをたべました。おいしかったです。（でもごはんはやきめしとスープです。それとかきです。）かきはたべるのをわすれそうでした。ちょっとやきめしをおにぎりにしてもってかえります。

広島市に原爆が投下された翌々日戦友が帰省した（Ⅱ）

濱野路　大森　孝

疲労のたまった、息苦しい、だらだらとしたしき伏しの続いた8月6日（月曜日）には日本にとって未曾有の大惨事が起こっていたのである。何故かマンネリ化した日常に慣れている時、あろうことか驚天動地の大被爆が起こっていたのである。勿論、情報は統制下にあるから、兵学校の生徒達は何もしらぬ。

ところが、6月に佐世保市街が猛爆を受けて炎上焼失した。その時、私達生徒は針尾島の避難した小山の頂上のタコ壷から眼を凝らしたのだが、帰省の措置はとられなかったのに、今月は戸上一君が特別に帰省せよという事になった。（前出の佐世保市被爆は秋吉生徒…6月20日の佐世保市大空襲である）

寧ろ小柄な方の色白の戸上君が翌日の校舎大被災のあと、帰省を賜るのである。（因みにこの頃は木村昌福校長で木村中将はかの有名なキスカ島霧の中の守備隊員五千名の無血救出で、一躍名をはせた人物）私達の認識では帰省とは「免生」のケースが多く、一般的に不名誉の事として忌避されていた事であった。

今、毎日新聞（昭和20年8月8日号）に依ればトップ扱いで※2

敵、広島市攻撃に新型爆弾を使用す。

B29少数来襲、被害相当。

（大本営発表）昭和20年8月7日15時30分。

一、昨8月6日広島市は敵B29少数機の攻撃により相当の被害を生じたり。

二、敵は右攻撃に新型爆弾を使用せるものの如きも詳細目下調査中なり。

その続き（左側に）

落下傘つき空中で炸裂。

軽視許さぬ威力、必ず退避せよ。

丈詔奉戴日…詔書が中央真上に掲げられている。

（併せて豊川海軍工廠が精密爆撃を受け、大被害。この頃敵機は恣まに日本上空を空爆、偵察をくり返し傍若無人。なすがまま…8月6日朝9時半頃熊野灘から侵入したB291機は日本海に進出（滋賀県を通って）舞鶴、敦賀付近を経て、東海軍管区へ。）

私には8月8日付の広島市への原爆投下のタブロイド版の新聞が食堂そばの掲示板に掲出されていたのを憶えていない。

食事のあと、豊川海軍工廠が空爆を受けたように、戦爆連合で遅い時間に（午前十時過ぎか？）爆撃機はB24で焼夷弾を投下して、（豊後水道を経て侵入）校舎3棟焼失。但し豊川工廠のように死傷者は無かった。敵機は防府海軍兵学校を爆撃後、滋賀県南部を経て、東海軍管区へ。豊後水道を通って脱去とは限らない。かようにして、列島はB29一機の自由自在の天敵なしの独り舞台となり、敵のなすが侭…坐視する悔しさに切歯扼腕、生徒達は口には出さぬもののうちひしがれて、天を仰いで嘆いている。万策尽きたという処かな。

広島一中出身の戸上生徒は、分隊附教官が広島の〝ピカ・ドン〟の詳しい情報を携えているので、秘かに個室に呼んで特別帰省を伝えている。

翌8月8日、303分隊の皆の前で、形式張った帰省許可の命令を受けて（課業前の僅かの時間に）、彼は手廻り品もそこそこに上り列車に乗るべく、広島市出身の生徒達と集合した。

戸上生徒は後年、神戸大学の教授として、戦後は大成する。彼の嘗めた塗炭の苦しみは迚も筆舌に尽くし難い。私事乍ら、昭和23年より、焼跡の広島市で高等師範学校生徒としての学生生活を送った私にとって、凡ての生き残った市民の〝ピカ〟という呼称に込められた万解の涙と深い恨みの念いは解決されることはなかった。痛恨の極みである。

昭和26年、広島市牛田東区を卒業して去る迄、『ピカ』が〝ピカ〟によってピカのために。という怨称は未だに生々しい。他事乍ら、私の下宿の前を流れる小川をさらに歩いてその山奥に、広島女学院の生徒達は、元の同校の附属農場跡の校舎へ通学していた。市内にあった専門学校以上で、もとの場所で戦後復活したのは、唯一つ己斐より西にあった鈴ケ峯女子専門学校だけではなかったのか？

広島の人々にはとりわけ惨めな戦争であった。市の周辺部の住宅地域とよばれるあたりでも、出勤途上の父（主人）や、姉（通学）や兄（通学、部員）を、ピカで悶死させて居ない家はない位であった。

戦争とは残虐極まる故に、決してあってはならず、防がねばならぬ。軽挙妄動はあってはならぬ。

（平成十九年九月二日　完）

備考……※1　木村昌福学校長について…〝文藝春秋〟誌の平成19年8月号のP177より引用。
秦郁彦氏は『キスカ撤退作戦』で守備隊五千二百名を救出した木村昌福は日本海軍で名将と呼べる存在です）
対談で秦氏の前に、戸高一成氏は日本海軍で名将と呼べる存在は、実は駆逐艦などの艦長に多いんですよ。（暗に木村校長などを指している）
注※2　毎日新聞　昭和20年8月8日付『二十世紀の歩み』
永久保存版２０００ミレニアム新聞紙面で見る……。

川柳

団塊の視野いっぱいにあるみどり　大森美智子

左手も重ね握手をする野心

ステンドグラスに夕陽が溶けてゆく祈り　坂本妙子

最初はぐう　なんて私はついてない

曾孫二人　春風駘蕩余生生き

枝葉末節　用件抜きの長電話

短歌

由良川のあの水戸口が　塞がりて　徒歩で神崎今は懐かし

海面に漣立てて小魚が　戯れ遊ぶ春のひと時

寒い朝寒さ厭わず元気よく　登校するは脇の良い子か

寒空に鳥がたくさん翔んでいる　餌があるのか心痛める

造形の神に逆らい何になる　感謝してこそ幸せ来る

亀井久太郎

一〇〇歳まで生き、ガンで死のう

四方寿朗

「ガンで死のう」などと言えば、皆さんのお叱りを受けるかも知れないが、これは元国立がんセンター市川平三郎所長の講演の表題である。氏は皮肉にも胃がんと前立腺がんを、自身で患者として経験された後、今なおガン予防の第一線で活躍を続けておられる。わが国ではこれまで老人の三大死因は①ガン②心臓病③脳血管障害とほぼ三等分されていたが、医学の進歩その他により、病を持つ老人の寿命が延びて、今では凡そ老人の二人に一人はガンで死ぬ。またガンが一番よい死に方とさえ言われるようになった。

その理由として、①抗ガン剤、放射線療法などの進歩により、ガン患者の延命が可能になった、②ガン末期にも麻薬その他の治療で、以前ほど苦しまなくてよくなった、③ある程度死期が予測できる。などの利点による。

「ガンは治らない」と嫌われるかも知れないが、ガン以外の老人の病気で完治するものなど無いに等しい。また「ガンと戦う」などという言葉は今や流行らない。むしろ、「ガンと共に生きる」ことが望まれる。他の臓器が力尽きるまで、ガンも何とか体の中で、おとなしくしていてくれれば、治る必要はない。幸い一般に老人のガンは発育が緩慢である。昔はガンの発病から死亡までは、高々五～十年と考えられていたが、現在では一個のガン細胞が増殖し始めるのは、死亡の二十年も三十年も前と考えられている。誰もが常にガンになる危険性を持っているのだ。ではガンはどうして発病するのか？これを防ぐにはどうすればよいのか？これらはなかなか難しい問題である。①親からの遺伝因子②生後の食事などの生活因子③その人の運、不運などが関係する。その中で①と③とは個人ではどうにもならない。しかし②っは努力次第で大いに効果を上げ得る。よく言われるのは、タバコを吸わない。大酒を控える。健康に害のある食事は摂らない。くよくよしないで明るく生きる。また精神的なストレスはあらゆる病気の発病や健康に関係する。

ガンになっても「がんばらない、あきらめない」はこの道の専門医鎌田實先生のモットーである。

私事で誠に恐縮ながら、私がガンで手術を受けた後、再発を気にしながら生きて来て早や三年六ヶ月になる。現在八十一歳を過ぎ、男の平均寿命を遙かに越えた私には、ガンでなくても、もう五年生きられれば御の字である。「あの世千日、この世一日」という言葉がある。極楽とか天国とか、宗教家は盛んに良いところのように宣伝するが、あの世から還ってきた人が居ないので確かめようがないが、この世の一日の方が、あの世の千日よりよほど有難いと私は考える。必ず行けるあの世へは、そう急がなくてもよい。

昔からよく言われる「笑う門には福来たる」が最近科学的にも実証された。落語を聴いて笑った後では、ガンを防ぐ免疫力が向上したという実験である。また「幸せはなるものではなく、感じるものなのだ」（渡辺成俊）と言われている。自分の不幸をいたずらに嘆く前に、この言葉を熟読玩味したい。一時期マスコミ界を賑わしたキンさんギンさんは、「毎月医者へ通って検査を受ける」などという生活とはおよそ縁遠い生き方

だったと私は考える。他人の目を気にせず、自由に明るく生きる。多少周囲に迷惑を掛けても、年寄りの事とご勘弁ねがうのが長寿の秘訣である。

急ぐと息切れがするのは、もっとゆっくり生きなさいと、体が教えてくれるのである。食べ過ぎて下痢するのは、生体の防御機能が順調に働いている証拠である。人工透析が受けたくないなら、夜間多尿を大いに喜ぶべしなど。年齢を気にせず何事も善意に解釈しよう。

以上ここまで一見悟ったような原稿を書いてみたものの、ガン患者の負け惜しみもある。所詮私は「ガンになってよかった」と心から言えるような心境には、とてもなれそうにない、今や往生際の悪い哀れな一患者である。

（二〇〇八・二・七）

成人になって

川﨑雅史

平成二十年一月十三日宮津会館で成人式が開かれ出席してきました。

久し振りに出会ったかつての同級生の顔はいかにも新成人という顔立ちで引き締まっていました。

式典が始まってからも、これといった騒動も無く、和やかに最後まで式は進むことが出来ました。

宮津市長や来賓の方々の祝辞を聞いて、これからは自分自身で責任を持ち、一個人として頑張っていこうと自覚しました。

今日、日本は色々な問題を抱えています。年金問題や食品偽装問題など、様々な分野で不祥事が起こっています。

こうした問題を解決するのは当然ながら起こした側が全ての責任を持たなければなりません。

例え全てを解決できても信用は大きく失墜することは免れることが出来ません。その信用を回復させるには多大な時間を要し、自分達の損害も大きくなっていきます。

こういうことを起こさない為にも、一つ一つの事柄を真面目に熟していくことが社会の中のルールなのだと改めて感じています。

今の日本経済の発展の軸となった団塊の世代の方々が次々と退職していく中で、これから社会で各々の役割を果たしていく自分達は団塊の人達から見れば、いわば子供の世代に当たります。

その世代である自分達が、彼らが築き上げてきた文化や社会を引き継ぎ、また新たな世代へと託せるように社会に貢献していくべきと考えます。

今はまだ勉学に励んでいる人や既に就職している人など様々ですが、数年後には誰もが社会に進出し、各々の企業で働くこととなりますが私も一人の大人としての自覚を持って役割を果たせるように頑張っていきます。

平成19年度　人権標語入選作品

友達と
　かわした言葉は　「また明日」
由良小学校６年　竹田真子

やさしくね
　してもされても　いい気もち
由良小学校２年　中西夕紀

「由良太鼓」雑感

北野誠治

従来から、由良神社の秋の大祭に神事として境内にて「由良太鼓」を奉納してきました。

この奉納太鼓には「神楽太鼓」「船頭おどり」「練り込み太鼓」「入り拍子太鼓」等があり勇壮賑やかに打ち鳴らします。

当日、神社神殿の前に浜野路・港・宮本の各氏子から総計八台の太鼓が並べられ、「けいご」と言う拍子と合わせて勇ましく奉納されます。

脇の奈具神社・上石浦の日吉神社・下石浦の住吉神社もそれぞれに奉納行事が執り行われていますが、今回は由良神社の奉納太鼓に限らせていただきます。

奉納太鼓は古くからの伝統ある一つの秋の大祭の行事であり、いわゆる「伝統芸能」であります。秋祭りの数週間前から各氏子（自治会）で夜間、子どもから大人まで地域を挙げて練習に取り組みます。

現在の形態になるまでには、時代の流れと共に変化して来ました。

戦後間もない頃の奉納太鼓の練習には農家の方が秋に収穫した「サツマイモ」を蒸して、よく差し入れて呉れた懐かしい思い出があります。

太鼓を打てるのは小学四年生からの男子に限られた時代があり、大人達が神楽・船頭おどりの奉納太鼓を打って来ました。少子高齢化の波を避けることが出来なくなったことにあいまって、「村おこし」の風潮もあり子ども達が地域に馴染む伝統芸能を伝授する絶好の場として、小学一年生以上の男女の「入り拍子太鼓」に「練り込み太鼓」、中学生・高校生の男子は「神楽踊り太鼓」「船頭踊り太鼓」女子は笛の囃子を中心に行われる様になりました。

因みに、浜野路では、はじめて太鼓のバチを握った子ども達は古タイヤを太鼓に見たてて打つ練習を続けます。戸惑い乍ら一生懸命習う姿には感動します。

長い年月の中で由良地区の太鼓は折々に発表の機会を得て披露して来ました。

その中でも、昭和五十四年の宮津市成人式ではオープニングセレモニーで力強く「練り込み太鼓」で祝賀に参加させて頂いたこと（その時、中学生で参加した息子も今は四十四才の中年）

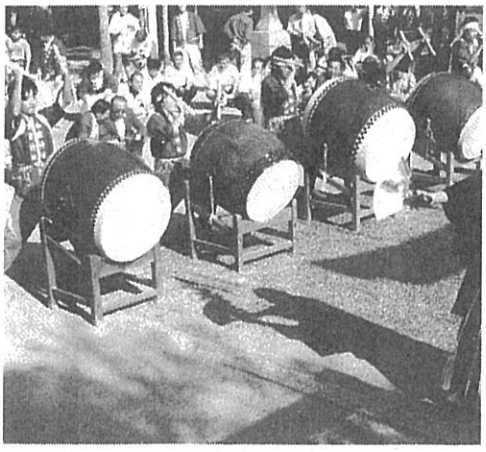
また、平成十五年の秋に開催された「宮津・与謝地方芸能まつり」では総勢四十余名の小学生から社会人までの打ち手が宮津会館の舞台で勇壮に披露し観衆を魅了させたその時の感激が蘇ってきます。

私も今年七十三才になり、後期高齢者とかの仲間入りも間近になってきました。

今日まで数十年間伝統有る由良の太鼓に携わることが出来た幸せをかみしめているところです。

今後、少子高齢化問題、「しんぱち（奉納太鼓の指揮者）」を含む指導者の育成等課題は多いと思いますが、伝統芸能「由良太鼓」の伝承に及ばず乍ら尽力したいものと考えています。

地域のみなさんの御協力の程よろしくお願いします。



追悼

元由良地区公民館主事　山下憲弥氏は、突然の病魔に冒され昨年十一月十三日永眠されました。享年八十二歳でした。

山下氏は、昭和三十一年から昭和三十七年に亘り公民館主事として誠実で温厚な人柄と卓越した手腕を発揮され公民館運営にご尽力されました。

当時の公民館活動は制度がスタートして間がなく模索しながらの運営であったと考えられますが今日の公民館活動の基礎を築かれたものであり、私たちは意思を受け継ぎ、公民館活動の発展に生かしていきます。

生前の静かな面影が懐かしく、地域の発展に寄与された山下氏のご冥福をお祈りいたします。

抗弁の余地なきにしも非ず

山口　幸一

〝百害あれど一利なし〟〝他人様に迷惑をかけるな〟世の善良なる嫌煙論者達の声である。皆かも反論する余地はない。

しかし、かつてこれ程喫煙が迫害され指弾された時代があったであろうか。もっとも心身共に成長過程にある未成年層に対し禁煙という措置はあったが一把ひとからげに嫌煙論が社会を圧倒した時代はなかった。今や抽象論と化したかに思える嫌煙論にわれら喫煙族は圧倒されるばかりである。大変な時代になったものだと思う。だが反論する事も出来る。ならばお前達が撒き散らしているマイカーの排気ガスはどうなんだ、これの方がもっと大きいぞお互い様だからと、だが子供の喧嘩まがいの水掛け論は止めておこう。

人間とはお互い迷惑をかけ合いそれを適切に許容し処理し乍ら生きている生物だと思うからである。

子供の遊ぶ声がウルサイという苦情がついに裁判沙汰になり、其の結果が「騒音」と認定された。余人はしらず私は怖い事だと思う。子供達が無邪気に遊び騒ぐ声がなんで騒音なのだ、それを騒音とさわぎたてる方が騒音ではないかと私は思うのだが。怖い事だ、これ程近代社会に於ける人間関係は許容の精神を忘れトゲトゲしく冷酷非情の社会になっているのか。

そもそも人類とは此の地球にとってはもっとも迷惑千万で厄介な存在なのである。そう思えば其処に目の届かないひとりよがりの迷惑論など全く意味がない、他者の行為もしかしたら他者の存在そのものが迷惑ともなりかねない近代社会環境のなかで他者の行為は無際限に拡大され批判の対象になってゆく、みんながクレーマーになり悪役さがしが異常とも思われない社会になってゆく、そんな社会は怖いと思うし嫌だ。

旅客機の爆音がウルサイと云う。だから其の騒音被害を私は嫌だから他人にもってゆけと云う。それ共旅客機をなくせとでも云うのか。

私も長い間他者に迷惑をかけつづけて来た一人である。むしのいい話だが吸いたい人と吸われたくない人の双方の要求を充たしてくれる工夫がないものかと思う。だがここでも問われるのは人間という、生臭い、そして厄介千万なシロモノをどう理解しどう許し合えるか、という事になる。

人間はお互い迷惑をかけ合って生きている生物だと云う単

純な事実を認識し理解し合えるかであろう。其の巾が近年益々せばめられてゆく様な気がする。知らない者同士が共存をしいられている近代社会に於いて人間関係は温かみを喪失して先鋭化してゆくばかりである。昨今の日本社会はシロかクロかでものごとを判断する短絡的思考、いわゆる二分割思考の社会である。

健康という錦の御旗をふりかざす人々に自責の念を抱き乍ら吸いつづけている私達は抗すべきもない。しかし絶対の正義なるモノが抵抗の余地なく存在し支配する社会はおぞましい。

かつて民族的純潔、優生学まで動員してそれを追究していったのはファシズムだった。昨今の健康ブームはそこまで行ってはいないが私の眼には決して健康とは思えない。“健康病”の様に思えるのだ。

喫煙族とは自分の体にも良くないと判っていながら尚頑なに吸いつづけている度し難いシロモノである。其の事への洞察と一定の寛容を欠いた社会は生き辛い。

最後に喫煙者に云っておこう。それによって身を持ち崩す事は自業自得であり、本人自身の責任である事を忘れてはならない。

さんせう太夫伝説の諸考

中西俊夫

中世（平安時代末期のころ）ささら説経、このような、ささら説経で語られる形が一番古いとされる、地蔵堂の付近ではこのような風景が毎日のように繰り返されていたであろうと思われる。では誰がそういうものを語るかというと、語った人は、ミコ、ミコは方々を渡り歩いて語りました。若狭、越前、津軽などと、またビクニも、熊野ビクニともいわれ熊野神社のあるところ、熊野参りの人の案内や牛王のお札、宿の世話などをしたようである。ボクニも室町の中期にはなくなる。つまり熊野信仰が衰えてその後には観音信仰などが隆盛期を迎える。熊野信仰が衰えると、修験、山伏の寄り添うところは熊野神社でなく何々村の鎮守様となってしまう。慶長七年（一六〇二）の検地帳に日置浜村ゴゼ田□□と出ており、このゴゼが、さんせう太夫の物語を語ったであろうと思われる。ゴゼは門つけもします。方々と歩き語ったであろうと思われます。このように、さんせう太夫の話は、ミコ、ビクニ、ゴゼなどによって広くひろめられていったようである。

今、私たちが物語を読むイメージと、昔の人の語ったイメージとは違うと思われます。昔の人は、この話しのなかで何を大事にしたか、お地蔵さんが、厨子王丸を助けたのだ　仏さんが助けてくださった、助けてくださったことは、厨子王丸が一歩一歩生まれ変わっていくこと、奥州五十四郡の主となるまでの生まれ変わっていく過程であって、終局的には、大阪の四天王寺で生まれ変わっていくすがた、ここで、梅津のおとどにみつけられ、乞食の子供が、人品いやしからぬ童の　持っていた系図を見ると、れっきとした岩城判官正氏の摘子、そこで岩城の国と、丹後の国を遺わされることとなる。

人間の生まれ変わる場所、それが如意寺のお地蔵さんの前であったり、あるいは国分寺であり、大阪の四天王寺であったということ。

昔の人は、このことが一番肝心なことで、あったのです。ここで御利益をもらって、人間が生まれ変わることができる。地

蔵さんを祈ることによって、人間が再生し、完成していく、このことが一番大切なことであった。いまの私たちとの考え方の違い、いまの人達との考え方が違うことを念頭において物語を読んでいかないと理解できない面もあります。

説経さんせう太夫は、はじめの頃は漢字では書かれておりません。さんせう太夫でした。

由良に昔から伝わる山庄略由来では、このさんせう太夫は、丹波の国の人、谷間村の産、(いまの美山町)、田邊府志という本には、丹波の国、氷上郡の人

由良、ここには、金の出る山がある。この土地を開き大変な分限者になったとあって、土地を開いた開発者で由良の人に恩恵を与えた人ともなっております。石浦にはさんせう太夫の屋敷ともいわれている地もあります。ここには六世紀後半の古墳もあります（横穴式石室をもつ古墳ではありますが、破壊がひどくその現形をとどめておりません)。

説経さんせう太夫では、由良の開発者としての山庄太夫であって、最後まで生かして改心させ後々までも由良のために役立ててほしいという気持ちが一方ではある。しかし、一方では安寿、厨子王をいじめ、こき使い安寿を自殺させてしまった太夫を徹底的に処分しないとすまんという庶民の気持、そういう気持が説経さんせう太夫ではつらぬかれております。

一方、お岩木さま一代記という資料の中では、さんせう太夫は、開発者であり、つまり神であり鬼であることが終始一貫して貫かれております。

由良山庄太夫略由来では、初めの方が、開発者としてのさんせう太夫、これが神であり、鬼なのです。そのように太夫を描き、そのあとの方では、その首を竹鋸で切り落とすといった、ここに由良に根づいたさんせう太夫の二つのものがかっとうしながら残っております。

説経さんせう太夫、江戸初期のものが一番古い、けれど、実際の話はもっと古く中世にあったものと思う。

由良の山庄太夫略由来では、近世後期のもの、けれど説経さんせう太夫の話が由良の略由来より古い話とは決められない。ということはそれまでに何らかの形で伝わっていたと思われます。この話は、もっともっと古い日本の民衆のなかにあった鬼とか、神とか、山の神、田の神とかそんなものに対するイメージが下敷きになって、さんせう太夫はすくなくとも前段は作られているように思われます。

とすれば、説経さんせう太夫よりは由良の略由来のほうがもっと古いイメージを伝えているということができそうです。

ただ最後のところは、説経さんせう太夫に妥協したという話になってしまっているといった感があるように思われます。

石浦の山庄太夫屋敷跡、古墳の時代をみると六世紀後ということになりますが、さんせう太夫がいたとされる時代といえば、九世紀か十世紀の頃になります。古墳の時代とでは三百年から四百年も違いますが、話では一緒になって山庄太夫屋敷跡ということになっております。時代も違うし、嘘の話だということになっております。

これは、山庄太夫屋敷跡なのだ。その信仰というものは、うそいつわりでないのだということ。

一つ大変なこととして、津軽のイタコがよんでいる、いわゆる口語りで

さんせう太夫の話は、岩城判官正氏が築紫安楽寺へ流される、そこで御台(みだい)が共と安寿、厨子王をつれて訪ねて行きました、と第三者として語っているのに対して、

お岩木様一代記では、私が安

寿でございますと、安寿が自分の身の上を物語っている、その安寿が由良へ来てみたのです、由良へ来てみたところ、こういうことがありました。

安寿とは、岩木山（青森）の神様で、その中に、私が由良へ行ってみたら、天の明神さまが石の唐櫃（からと）に体をお隠れになり、さんせう太夫が太鼓、三味線でお神楽（かぐら）をあげている音でした。

古墳のところでさんせう太夫がお神楽をあげている。

この神楽をあげているさんせう太夫とは一体何物なのか関心のふかいことです。

お岩木さま一代記のさんせう太夫は鬼なのである。あの恐ろしい鬼ではなくて、オニ（大人、または臣人のことであります。

農耕の神様、田の神様のことで大きな素晴らしい力をもって、私たちを護ってくださるオニ。

地域の護り神様、神楽の中心にあるものはオニ、庶民の中に伝わるところの信仰であります。

このような伝承とは、ここが山庄太夫屋敷跡として長い間云い伝えられていることはムゲに退けてしまうことはできません。

時代が違い、何百年違うからということで、民間の習俗、民間の信仰というものは年が何年違っても、そんなことはかまわない、人々が長い間守り伝えてきたところの伝承とはこんなものなのです。

さんせう太夫の伝承も、その土地その土地に結びついていろんな伝承が生まれてくるように思われます。

参考資料

山椒太夫伝説の研究、さんせう太夫考、お岩木さま一代記

絵・三森　明

私と野球（山下憲弥氏を悼む）

飯澤　登志朗

私たちが地域の青年で野球チームを結成したのは昭和二十八年頃でした。

当時、青年団組織もなく何とかしたいと考え、青年同志会として発足し、青年学級として習字教室や音楽サークルを始め、スポーツとして野球チームを結成しました。

平均年齢二十一歳位の若いチームで職場も勤務時間も違いましたが不思議に気の合うメンバーが集まっていました。

その若いチームに力を与えていただいたのが当時の公民館主事山下憲弥氏でした。

今の車社会ではなく、宮津での試合も平日の午後であったり遅い時は会社や職場が終了する夕方五時試合開始といった内容でした。

現在であればマイカーで球場に集合となりますが、当時はメンバーに車所有者は皆無、試合日程に合わせて丹後由良駅に集合し汽車で試合に望んでいました。

用具類も充分でなくグローブも自分で修繕する状態でしたが、野球が出来る喜びがすべてを超越していたのです。

ボールが無い、バットが折れた、練習で小学校校舎のガラスが割れた、その都度公民館に無理をお願いして援助を受けていました。

今でも当時のメンバーが集まるとその頃の様子が話題となり皆んなが昨日の出来事のように目を輝かせて話し合っています。

チームを結成して十年目位だったと記憶していますが、宮

津大会で優勝し京都府大会に宮津代表として出場が決まった時です。

旅費もなく、公民館に相談して資金カンパの映画会開催となりました。

小学校体育館で東映時代劇の映画だったと思いますが実施していただき旅費を確保、試合前日の夕方京都へ向けて汽車の旅ですが常宿は農協会館でした。

過去にも京都まで試合に行っていましたが初戦負けが多く、地域差を感じていました。

しかし、チーム結成十年ともなると度胸では負けない者の集まりになっていました。

一週間から十日間位でしょうか、京都から帰り、また夕方の汽車で京都の繰り返しでした。

また勝ってしもた、休みがないようになった、家の者が野球ばっかり苦情が出る。こんな会話がチーム内に充満しました。

当時の山下主事に話をすると、「折角勝ち上がっているのに、お金のことは心配せず次の試合のことに集中して」と励まされ、ベスト十六、次に勝てば準々決勝の位置まで残りました。

結果は敗退でしたがその場面は良く憶えています。

私がランナーとしてセカンドベース上、次打者K君の三遊間安打でホームへ向かうもタッチアウト、試合終了となったのです。

私がもう少し俊足であれば。

もち論山下主事だけでなく、館長の中西林兵衛氏や地域の皆様のご支援とご協力により私たちは青春を野球とともに駆け抜けましたが、山下主事の適切な指導と激励を忘れることは出来ません。

由良地区の子供が減少し、少年野球チームが解散、栗田少年野球チームと合併していますが、どんな環境でも野球の出来る楽しさは忘れることのない事実です。

山下憲弥氏の急逝を悼み、謹んでご冥福をお祈りいたします。

絵・三森　明

編集後記

立春を過ぎた頃、大阪市内で十一年振りに積雪、京都清水寺からも雪の便りがありましたが、「公民館だより」をお届けする頃は春を感じることでしょう。

平成十九年度の公民館行事も、公民館だより一三二号の発行で終了となります。

料理教室での子どもたちの楽しい雰囲気や地域の方々の貴重なご意見等をいただきありがとうございました。

四月になりましたら、公民館を始め各団体とも新しい体制でスタートとなります。

進学、就職で若者が故郷から旅立ち益々高齢化が進みますが診療所問題の明るいニュースもあり、住みよい街、安心して住める街になることを願い一年のお礼といたします。

（飯澤）